

# 大会長講演「つなぐ つむぐ おりなす 放射線看護学 ——すべての看護職者の学びの集積から——」 “Connecting”, “Spinning”, “Weaving” radiological nursing science: From the accumulation of learning on all nurses

浦田 秀子

Hideko URATA

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

9月8日(土)・9日(日)の2日間、長崎大学医学部キャンパスにおいて一般社団法人日本放射線看護学会第7回学術集会が開催され、全国から315名が参加した。この4月に本学会は一般社団法人となり、記念すべき第1回目の学術集会であった。開催直前の9月6日に発生した北海道胆振東部地震のため参加できなかった2名の方は紙上発表となった。震災に遭われた方々にお見舞いを申し上げるとともに、1日も早い復興を祈念している。

本学術集会のテーマ「つなぐ つむぐ おりなす 放射線看護学—すべての看護職者の学びの集積から—」のもと、研究発表は59題(口演28題、示説31題)で、各セッションで活発なディスカッションが行われた。プログラムは会長講演、プロローグ、基調講演、教育講演、特別講演、シンポジウム3題、学会企画1題、交流集会2題であった。ご参加いただいた会員・非会員の皆様、ご支援いただいた企業、関係職種、関係機関の方々に心より感謝を表したい。

大会長講演は本学術集会のキーワードである「つなぐ つむぐ おりなす」の3つで構成した。

## 1. 放射線看護のはじまり—先輩たちの偉業を長崎大学の記憶としてつなぐ—

「看護師と放射線との関わりは、自らも被爆しながら被災者をケアした広島長崎の看護師に始まります。」と日本放射線看護学会のホームページにあるように、多くの先輩諸姉は、光とともに一瞬にして倒壊し、炎となり、阿鼻叫喚の巷と化した原子野に立ち続け、救護活動を行った<sup>1,2)</sup>。その中で、久松シソノ氏は永井隆博士とともに被災直後より、負傷者の応急処置、永井先生を隊長とする救護隊で活動された。「私たちが被爆しているわけですから、ちょうど放射線治療の副作用のような身体状況で、動作も鈍りがちでした。倒れそうになる身にむちうって、名ばかりの医薬品の入った買い物籠を下げて三ツ山へと出発しました。・・・中略・・・。巡回していくと、患者さんはもちろんですが、家族まで喜んでくださいます。行ったときと帰りでは表情まで変わって元気になる患者さんを見ると、自分たちのつらさも吹き飛ぶのでした<sup>3)</sup>」。被災直後からの救援活動の功績により2005年、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞された。

長崎大学医学部保健学科では「被ばくと看護学」を開講している。2単位(30時間)の科目である。学生は放射線や被ばくに伴う人々の反応を学び、被爆者のケアから始まった放射線看護の歴史は現在に脈々とつながれている。

doi: 10.24680/msj.7.1\_16

## II. 放射線看護分野の専門看護師教育へ—専門分野としてつむぐ—

現代の医療において放射線は日常的に利用されており、多くの看護職者は日々、放射線診療を受ける対象者と関わっている。したがって、放射線被ばくや放射線の健康影響、放射線防護の知識や技術はすべての看護職に必要である。しかし、看護基礎教育において放射線や放射線被ばくに関する教育内容は絶対的に不足し、卒後教育においても系統的な教育はなされておらず、そのことは、2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所事故発生時に露呈した。医療職を含め住民は放射線、放射線の健康影響・リスクへの不安・恐怖で大パニックをきたし、放射線の専門的知識を有する人材育成が喫緊の課題となった。

大学院で放射線看護の専門家育成を行っている長崎大学、弘前大学、鹿児島大学はこのような状況に対して、日本看護系大学協議会の高度実践看護師教育課程に「放射線看護」の分野の特定を申請した。学術的基盤としての本学会の設立し、さらに看護学および医学関連学会の多くの方にご支援をいただき、「放射線看護」が専門分野として2015年に特定された。3大学ともに放射線看護分野の高度実践看護師教育課程（専門看護師）が認定され、2017年4月から教育を開始した。放射線看護は大きくは「医用放射線利用に伴う看護」と「被ばく医療における看護」の2つの領域であり、ともに被ばくのケアの低減、防止が共通点であることから、放射線防護が学術的基盤と考える。さらに放射線の安全・安心に関して豊富な知見・技術を有する関連学問との連携による学際的な視点からエビデンスを集積していくことが放射線看護の発展・進化に結びついていくと考える。

## III. 災害・被ばく医療科学共同専攻における教育・研究—専門職としておりなす—

2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故によって、災害サイクルに応じた放射線の専門的知識を有する人材育成の重要性が明らかになった。

長崎大学は世界で唯一核被害を受けた大学として放射線の人体への影響について研究に取り組んできており、被ばく医療学・放射線健康リスク制御学で実績がある。また、福島県立医科大学は東日本大震災を経験し災害医療分野で実績と貴重な経験・教育用フィールドを有する。そこで、両大学のそれぞれ独自の実績と強みを持ち寄り、相乗的に力を結集し、「災害・被ばく医療科学共同専攻」を2016年に設置した。

本専攻での教育はテレビ会議システムを使った遠隔授業、両大学の特色ある講義および実習である。共同大学院としての強みを活かし、放射線看護に関する専門的知識を持った看護師・保健師を育成をする。そのことは将来的な指導者としての人材育成に資するものと考え。2018年3月には1回生が修了し、病院および行政機関等で活躍している。研究への取り組みにより、今後エビデンスを積み上げていくことで、放射線看護の専門性の確立および放射線看護学の構築につながるものと考え。

## 引用文献

- 1) 長崎医科大学附属病院看護婦原爆被爆者体験編集委員会. 夾竹桃よ永遠に：原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ. 長崎医科大学附属病院看護婦原爆被爆者体験編集委員会, 長崎, 1990.
- 2) 宮崎トミホ. 自らも被爆しながら救護活動をした看護師の語り. 日本放射線看護学会誌. 2014, 2(1). 50-51.
- 3) 久松シソノ, 川島みどり (編). 凜として看護. 春秋社, 東京, 2005.